

青森総体の思い出

萱沼広久

青森は寒かった

昭和 41 年夏、地元の人たちも「異常」というほど青森は寒かった。

朝、三沢に降り立った我々の息が白く見えるほどだった。翌日の軽い練習も肌寒い小雨の降る中だった。試合当日は晴天であったが、グラウンドには水たまりがいくつか残っていた。試合の方は 0-1 で初戦敗退であった。シュートチャンスにボールを蹴らずに、キーパーの頭を蹴った奴がいた。それが一番の印象でもある。

他のチームにはないものが

総体の県予選は、初戦で危うく勝ちを拾った。後も快勝には程遠い勝ち方だった。しかし、優勝してしまった。監督、コーチ先輩たちの誰がこのチームの優勝を信じていたのだろうか。いや、我々選手の誰もが総体に出場できるなど思ってもいなかったに違いない。強いだけ、上手なだけでは頂点に立てない時がある。当時、県大会はわずか 60 数校。まして今は 200 校を越えての予選である。出場機会は当時よりはるかにむずかしい。しかし、当時の我々には何か他のチームにはなかったものがあつた筈…

歴史の真ん中に

時が記憶を曖昧にし、或いは消し去っていく。あれから 35 年、今それが小田原高校サッカー部 70 年の歴史のちょうど真ん中にある。そしていつのまにかその歴史の始まりの方へ押しやられる。しかし、それぞ

れの部員が、或いは学年が、それぞれの歴史を創る。そして、それがいつまでたっても心の真ん中にある。時々それが厄介でもあり、励みにもなる。